

No.55

September 8, 1995

Information

講 演

1995年6月15日（木）・第72回談話サロン（東京・弘済会館）

講師・題目

安岡高志：「東海大学の授業評価と魅力ある授業」

日本工学アカデミー

THE ENGINEERING ACADEMY OF JAPAN

東海大学の授業評価と魅力ある授業

安岡高志

1948年1月生まれ
1970年3月 東海大学理学部化学科卒業
1975年3月 東海大学理学研究科化学専攻博士課程修了
1975年4月 東海大学理学部化学科助手
1989年4月 東海大学理学部教授 現在に至る
1992年4月 東海大学教育研究所授業開発研究部門
副主任教授
1993年4月 同 主任教授 現在に至る
専門分野：環境化学(大気汚染)、一般教育学会常任理事、私立大学連盟研修企画委員等歴任。
著書：化学物質の物性測定法(共著)、高等教育における教授活動—評価と訓練(共訳)。



司 会(富浦政策委員) それでは、定刻になりましたので、第72回の談話サロンを始めさせていただきますと思います。

実は、本日は政策委員長の川崎先生が司会のご予定でございましたが、急に海外にご出張だそうで、私にかわりをするようにと、こういうご用命でございましたので、かわらせていただきました。富浦でございます。

実は、きょう、慶応義塾大学の真壁先生と東海大学の安岡先生、お二方にお越しいただきまして、ご案内のような内容でお話をお願い申し上げましたが、ちょっと裏話をさせていただきますと、日本工学教育協会の関連機関といたしまして、関東工学教育協会がございます。この関東工学教育協会というのは、非常に古くから関東地区の工学部の学部長先生にお集まりいただきまして、1年に1度、工学部長会議という会合を開かさせていただいております。そこで、昨年、実は東海大学と慶応大学からお二方、講師をお招きいたしまして、それぞれの大学における教育法ということについてお話を承ったわけでありまして。これは大変感銘の深いお話でございました。そこで、今回、再びこの場で諸会員先生方にその内容をご説明いただくのは極めて時宜を得ているのではなかろうか、

ということで、ただいま政策委員会では、川崎部会長のもとでいわゆる教育教授法について、いろいろ広く検討を進めている過程でもございますので、そういうことに関連いたしまして、川崎委員長からのお話もございまして、両先生をお招き申し上げた次第でございます。

恒例によりまして、スピーカーのご略歴等を簡単にお話し申し上げたいと思いますが、安岡先生は東海大学の理学部の化学科のご卒業でございます。東海大学には大変おもしろい機関がございまして、教育研究所授業開発研究部門というところの主任教授を現在お務めでいらっしゃいますが、当然、東海大学理学部の化学の教授をご併任でございます。教育研究所授業研究、こういうことで授業開発についてもいろいろご研究をしておられるということでございます。

それから、お二方、並列でご紹介させていただきますけれども、真壁先生は慶応大学の電気工学科をご卒業でございまして、現在は慶応義塾大学大学院の工学研究科電気工学専攻ということで、教授をしておられるわけでありまして、ご専門はプラズマエレクトロニクスであると承っております。

安西理工学部長にいろいろご相談申し上げます。

たところ、真壁先生が非常にご熱心に教育教授法の改革に取り組んでおられるので、ぜひ真壁先生の話聞いてもらいたい、こういうご推挙をいただきました。安岡先生のほうも前後いたしまして、田中理工学部長のご推薦をいただいたわけでございます。

それでは、最初に安岡先生から東海大学の授業評価についてお話を承りたいと存じます。先生、よろしくお願いいたします。

(編集担当注)

司会の冨浦政策委員のお話のように、この講演会では東海大学の安岡教授と、慶應義塾大学の真壁教授のお二人のお話を伺い、二つの講演をまとめた印刷物として発行の予定でしたが、その後真壁先生から、講演内容を現時点で印刷物にするのは、諸般の事情から延期または中止にして欲しいとのお申し出がございましたので、今回の EAJ Information No.56には、安岡先生の講演と、安岡先生に対する質疑応答だけ掲載のことに致しましたのでご了承下さい。

安 岡 ご紹介いただきました東海大学の安岡です。OHPを使わせていただきます。よろしくお願いいたします。

東海大学では1993年度から新しいカリキュラムを実施し、その新しいカリキュラムにつつまして授業評価を導入いたしました。先ほど紹介いただきました教育研究所が、希望の先生方に依頼をして、約10年ほど前から授業評価を行ってまいりました。9年間の実績として1992年度には、湘南校舎の約700名のうち16%の教員が自主的に参加しておりました。93年度からはこれが制度として導入されたわけです。実施率は93年度の前期が99%、93年度の後期が96%でした。そして、94年度の前期が98%、後期が95%と完全実施という状態であったわけです。先生方の自主性が理想的ですが、この実施率からみて制度の必要性を実感しています。

実際の授業評価を含めました評価システムについて申し上げます。図1に示しましたように東海大学全体の評価体制は学長を中心とします執行部が行っております。学長は諮問機関であります大学評価委員会を設けております。したがって、

学長は諮問に対する答申を受けて、あるいは学部長会議の議を経て決裁致します。決裁されますと、評価推進室という実行機関が実行するシステムとなっています。また、各学部には学部長の諮問機関であります学部評価委員会、学科には学科評価委員会があります。

授業評価に限って申し上げますと、大学評価委員会が諮問に答えて答申をし、学部長会議の議を経て学長が決裁いたしました。そして、評価推進室がそれを実行したわけです。現在は評価推進室が各個人に授業評価票を届けるところまで行っています。そして、個人の教員は自分の授業で授業評価を実施し、終了後執行部から授業評価の処理の委託をうけている教育研究所に届けます。そして、教育研究所は個人のデータを処理いたしました返却致しております。

93・94年度が試行期間で、とりあえず実施してみてくださいということです。95年からは本実施ということで、丁度今、授業評価票が配られていますが、試行期間と本実施はどこが異なるかと申しますと、試行期間では個人の先生が教育研究所からのデータを個人的に見て、密かに自分の授業の対策を練るという域を出なかったわけです。本実施では、学部学科は全体として必ず授業改善に結びつける方法を検討することになっております。それでは、どのような方針で行うかと申しますと、方法・方針は問われません。ただし、大学の指針としては、「各教員は授業評価のデータに自己診断書をつけて、主任教授に提出する。そして、主任教授はそのデータをもとに学科全員で授業改善に結びつける方法をとる」という案が示されています。自己診断書とは授業評価の結果に担当教員がコメントや改善目標を記入したものです。この案にしたがう必要はありませんが、条件は同等あるいはこれ以上の効果が望めそうなものということです。

今から主に授業評価の結果について紹介させていただきます。図2は教育研究所が行っております授業評価の小項目の評価の和と総合評価の関係です。10年以上前に始めましたときには、実際に授業評価が信頼できるかどうかということが問題ではなくて、大多数の先生方は、授業評価をす

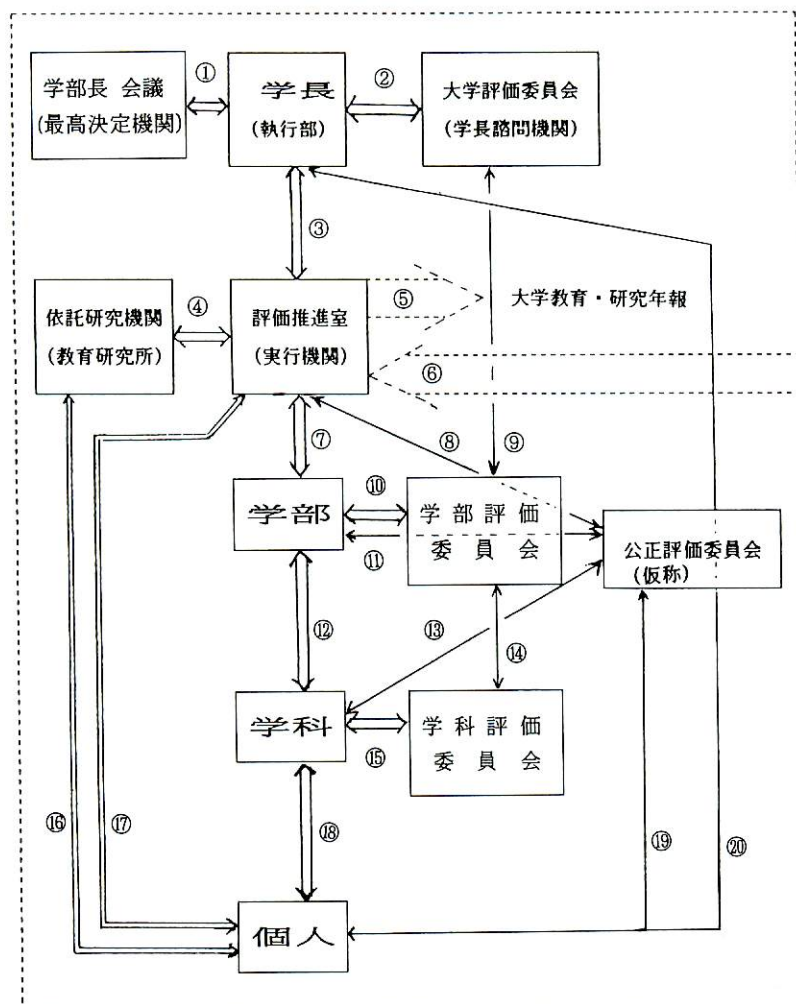


図1 東海大学自己評価体制マップ

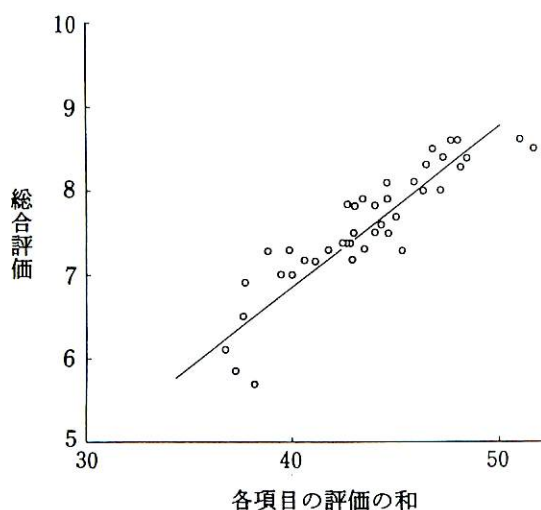


図2 各項目の評価の和と総合評価の関係

ること自身けしからんという状況でした。このような状況の中で、まず最初に信頼できるということを何とか証明したいと思ひまして、講義の質、明快性と構成のよさ、効用性、刺激や興味、声の質・明瞭度、情熱、人間性等小項目の評価の総和と総合評価の関係をとってみました。図から分かりますように相当よい直線関係が見られますので、学生は単に思いつきでつけているのではなく、小項目で評価した上で総合評価をつけているということから、授業評価を信頼してよいという実感を始めてまもなく得ました。

しかし、実際に授業評価を実施してみますと、ほんとうに学生の評価を信用してよいかどうかということが非常に問題になります。100人学生さんがおられますと、そのうちの1人か2人はまじめに回答しているとは思えない学生さんがいます。そ

の場合、大多数の先生方は、その1人か2人の学生さんの書いてあること、あるいは評価を見て、(例えば、全て評価を10点法の1につけてある)「それ見ろ、こんなデータがあるから信用できない」と申されました。図3は教育研究所が行ってありましたときのある年のデータを総合評価の高いものから低い方へ並べたものです。そのときに一番高い評価が8.6で、一番低い評価が5.7でした。そこで、大体0.5おきに無作為に抽出して並べた結果です。もちろん総合評価の平均が高ければ山は右に寄っているわけです。そして、総合評価が低くなるに従って山はなだらかになり、1、2、3の評価が増えるわけです。先生方がごらんになって表現は悪いですが「最も頭にくる」あるいは「授業評価が信頼できない」というのは、この1とか2とか3につける学生がいることです。私のこの授業が1や2や3のはずがないと思っていらっしゃるわけですから、ごもっともです。しかし、この結果を見ますと、1や2や3をつけた学生が不まじめであったとしても、この授業は不まじめな学生をつくるような授業であったということで、信用してよいというのが私の結論です。そういう意味で、確かに不まじめな学生もおりますが、それは全体から言うと数は少なく、クラスの平均をとれば、その平均値を狂わすほど不まじめな学生は多くはいないという結論です。

このようなことを10年ほどやっておりましたので、東海大学は授業評価を大学改革の中で比較的早く取り入れて実施する運びになったわけです。実施したことのない教員もいましたけれども、少なくとも10年間、授業評価をやりませんか、やりませんか、やりませんか、と、オウム真理教ではありませんけれども毎年聞かされていたわけです。今回、大学が制度として授業評価を導入したときには、我々が思っていたよりは抵抗は少なく、先ほど申しましたような実施率だったわけです。

図4は93年度と94年度前期の学部別授業の総合評価の平均値です。この基になっておりますデータ数は93年度の前期が862、後期になりますと1,025、94年度前期が1,392というふうに次第にデータが多くなっております。この次第に多くなるわけは93年度から実施のカリキュラムが対象、すな

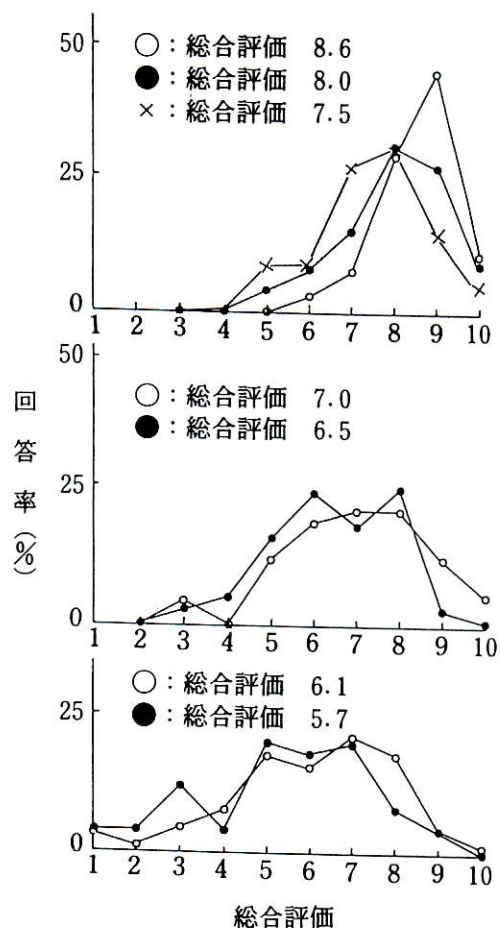


図3 総合評価の分布

わち93年度は1年生のみが対象、94年度は1、2年生が対象だからです。

図4に示しました学部別評価は、各学部で開講されている教科の全平均です。この図で目につくことは理学部、工学部の授業評価の結果が低いことです。まず頭に浮かぶことは「工学部と理学部の教員は一体何をやっているんだ。まじめに教育を行っていないのでは」、それとも「理学部と工学部の学生さんは質が悪いのでは」ということだと思います。これは私の偏見かもしれませんが、文系の先生方よりも工学部の先生方が熱心でないようには見えません。もしかすれば、熱心にやり過ぎるからいけないのかもしれませんが。何はともあれ、評価が低いという事実があるわけです。

図5は、科目別授業評価の平均値です。東海大学は一般教育科目を総合教育科目と改称し、主な科目は総合教育科目、外国語科目、専門基礎科目、専門科目です。図から、最も高いのは外国語

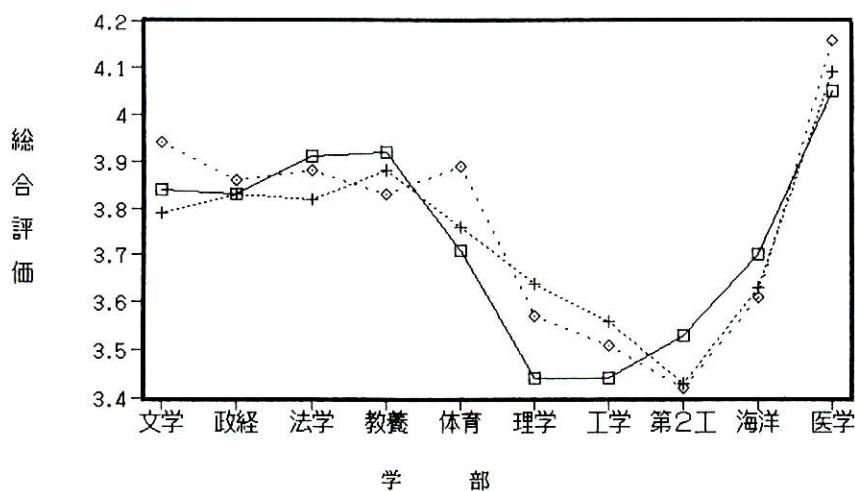


図 4 学部別開講別評価

□ : 93年度前期 + : 93年度後期 ◇ : 94年度前期

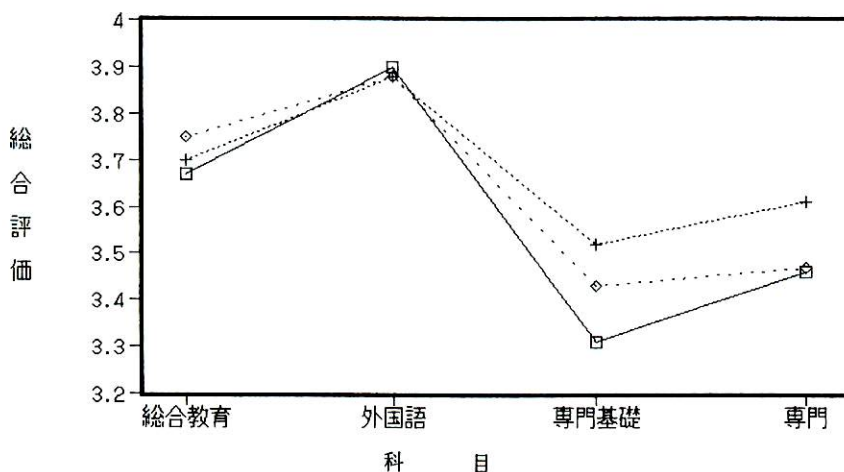


図 5 科目別評価

□ : 93年度前期 + : 93年度後期 ◇ : 94年度前期

科目で、最も低いのは専門基礎科目となっています。全体としては専門や専門基礎が総合教育や外国語科目に比べて相当低いことが分かります。この理由は別として、ここに専門や専門基礎科目の評価が低い事実が見られます。

図 4 において、理学部と工学部の授業評価が低かったわけですが、この専門基礎や専門科目が低いということが、工学部や理学部の授業の評価が低い原因ではないかと思ひまして、1年生のカリキュラムを見ますと、1年生では理工系以外の学部では、専門や専門基礎科目は開講されている数が非常に少なく、5%以下でした。ところが、理学部や工学部のカリキュラムを見ますと、

専門とか専門基礎科目が1年生の授業からびっしり入っています。多い学科では専門や専門基礎科目が半分ほど入っている学科があるわけです。したがって、先ほどの理学部と工学部の評価が低かったのは、この専門や専門基礎科目が1年生の授業に入っていることが大きな原因だろうと思われまます。

この予測からでは3、4年生になって、文学部などでも専門が入ってくると、どちらも低くなる可能性があるわけですが、これについては今後の結果を見なくては正確なことはわかりません。しかし、高校でも、私立の正則高校が同じく授業評価を行っております。そのデータを見ますと、総

合評価という表し方ではありませんが、一般的に理数系の科目が評判がよいようです。それから、茨城大学の理学部の臼井先生は、数式の入っている科目は一般的に理解が困難で、学生が難しく感じていると書いておられました。93年度のカリキュラムから授業評価を行いましたので、93年度は1年生のみが対象です。94年度は1、2年生が対象です。この段階では確かに理学部と工学部の評価が低い原因は、専門や専門基礎科目が多く入っていることが原因であろうかと思われますが、それでは、ともに専門科目になった場合、同じくなるかと申しますと、正則高校や茨城大学の例から同じくならないかもしれないというのが私の感触です。しかし、少なくとも現在1、2年生が対象の段階において大きな差があるのは専門と非専門科目の差であると思っております。

図6は教員の所属別評価の平均値です。図4のように理学部と工学部の教員の評価が低いことは同じです。すなわち、理学部と工学部の専門と専門基礎科目を主に理学部と工学部の教員が担当しておりますので、理学部と工学部の教員の授業評価が低くなっております。図には文明と示されていますが、東海大学では文明研究所がありまして、ここが総合教育を担当しています。そして、外センとして示しました外国語教育センター所属の教員が外国語を担当しております。この結果は図5の科目区分別評価と所属教員の担当科目とが

非常によく一致していることを表しています。ただ、文学系学部において評価が非常にばらついておりますが、これはデータ数が非常に少ないためです。例えば、政経学部がここに示されていない理由は、あまり数の少ない科目の評価を示しますと、個人を特定できる可能性が高くなりますので、5科目以下のものは省いたためです。このように、文系学部の所属教員の実施科目数が現在は非常に少ないということではばらつきが大きくなっています。

図5の結果から、科目区分により、評判がよかったりよくなかったり差がみられましたので、それぞれの科目区分ごとに重回帰分析を用いて、授業の総合評価を支配する項目について検討してみました(表1)。実際に用いております授業評価の項目は重回帰分析の下に示しましたように「シラバスにそって予定どおり行われたか」、「目的は明確だったか」、「興味を持てたか」、「よく理解できたか」、「声は明瞭であったか」、「熱意を感じたか」、「学生の参加を促したか」、「重要なところを強調し、要約してくれたか」、「OHPや板書の使い方はよかったか」、「教室内の秩序は保たれたか」、「この講義に対する総合評価を示してください。」等となっております。

この重回帰分析というのはたくさんある項目がお互いに相互作用をし合った結果、その項目が全体の中で総合評価にどの程度の比重を持っている

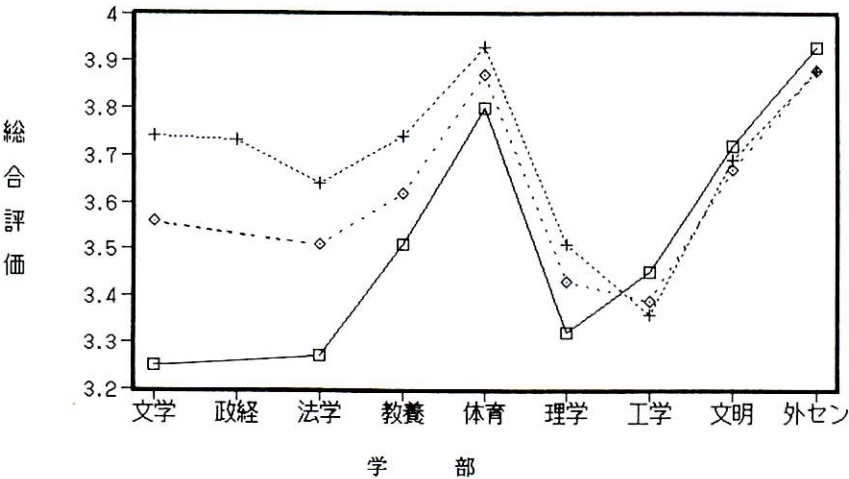


図6 教員所属学部別評価

□ : 93年度前期 + : 93年度後期 ◇ : 94年度前期

表 1 科目別重回帰分析の結果と評価項目

総合教育科目の予測式の係数

定数	I	Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅱ-3	Ⅱ-4	Ⅱ-5	Ⅱ-6	Ⅱ-7	Ⅱ-8	Ⅱ-9	Ⅱ-10
-0.025	0.080	0.113	-0.102	0.251	0.111	0.074	0.122	0.033	0.206	0.095	0.053

総合教育科目において総合評価に対する項目のウエイトは「Ⅱ-3 授業の内容は興味が持てましたか。」が最も大きく、次いで「Ⅱ-8 教師は授業において重要な所を強調し、要約してくれましたか。」、「Ⅱ-6 教師の授業に対する熱意を感じましたか。」の順になっており講義全体の傾向と同じである。

外国語科目の予測式の係数

定数	I	Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅱ-3	Ⅱ-4	Ⅱ-5	Ⅱ-6	Ⅱ-7	Ⅱ-8	Ⅱ-9	Ⅱ-10
-0.186	0.071	0.108	-0.020	0.327	0.029	0.023	0.101	0.048	0.165	0.131	0.088

外国語科目において、総合評価に対する項目のウエイトは「Ⅱ-3 授業の内容は興味が持てましたか。」が最も大きく、しかも係数が他の科目の場合より大きいことから、興味が持てるかどうかが支配的である。

専門基礎科目の予測式の係数

定数	I	Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅱ-3	Ⅱ-4	Ⅱ-5	Ⅱ-6	Ⅱ-7	Ⅱ-8	Ⅱ-9	Ⅱ-10
0.197	0.055	0.004	0.177	0.166	0.121	0.041	0.148	0.010	0.195	0.066	0.111

専門基礎科目において、総合評価に対する項目のウエイトは「Ⅱ-8 教師は授業において重要な所を強調し、要約してくれましたか。」が最も大きく、次いで「Ⅱ-2 シラバスに記載された授業の目的は授業の中で明確でしたか。」、「Ⅱ-3 授業の内容は興味が持てましたか。」の順になっており、興味より重要な所を強調し、目的をはっきり述べるのが求められている。

専門科目の予測式の係数

定数	I	Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅱ-3	Ⅱ-4	Ⅱ-5	Ⅱ-6	Ⅱ-7	Ⅱ-8	Ⅱ-9	Ⅱ-10	
	-0.126	-0.013	0.005	0.161	0.207	0.123	0.079	0.109	0.037	0.187	0.072	0.097

専門科目において総合評価に対する項目のウエイトは「Ⅱ-3 授業の内容は興味が持てましたか。」が最も大きく、次いで「Ⅱ-8 教師は授業において重要な所を強調し、要約してくれましたか。」、「Ⅱ-2 シラバスに記載された授業の目的は授業の中で明確でしたか。」の順になっており、専門科目は同じ専門科目でも専門基礎よりも興味が大きなウエイトをしめている。

学生による授業評価アンケート項目（講義科目用）

- I この授業におけるあなたの出席状況や受講態度等を総合した自己評価を示してください。
- Ⅱ-1 シラバスに沿って予定通り、授業が行われましたか。
- Ⅱ-2 シラバスに記載された授業の目的は授業の中で明確でしたか。
- Ⅱ-3 授業の内容は興味が持てましたか。
- Ⅱ-4 授業の全般についてよく理解できましたか。
- Ⅱ-5 教師の声や言葉は明瞭で、聞き取りやすかったですか。
- Ⅱ-6 教師の授業に対する熱意を感じましたか。
- Ⅱ-7 教師は一方的な講義ではなく学生の参加(質問、発言等)を促しましたか。
- Ⅱ-8 教師は授業において重要な所を強調し、要約してくれましたか。
- Ⅱ-9 板書・OHPは見やすかったですか。
- Ⅱ-10 教室内の秩序(学問をする雰囲気)は保たれましたか。
- Ⅲ この講義に対する総合評価を示してください。

かというように理解していただければよいと思います。予測の式が重回帰分析の結果ですが、総合教育科目では2－3の項目、すなわち「授業の内容は興味が持てましたか」が最も総合評価に対してウェイトが大きく、次が「教師は授業において重要なところを強調し、要約してくれましたか」、「熱意を感じましたか」の順になっています。総合教育科目では興味が持てたかが最も大きなウェイトを示していますので、この興味と総合評価の関係を示したものが図7です。両者の間には相当よい直線関係がみられ、授業における興味が大切であることが理解されます。

教育研究所では先生方に評価をお返しした折りに、評価項目をどのように改善すべきかというア

ンケートを取りましたところ、一番多かった意見は、相手がいるのだから、シラバスどおりに授業が進まず、シラバスに拘束されて非常に授業が行いにくいという意見でした。シラバスの予定と総合評価の関係を図8に示しました。図7の興味と総合評価の関係よりは、相関性が低く、総合評価に対してはあまり気にしなくてもよいことが分かります。初めてシラバスを書いて授業を行ったわけですので、予定通りにはできないと思いますが、裏を返せば、今まで長い間、授業を行って、予定通り進行できるかということにあまり注目をしなかった結果であると思っております。

表1の2段目は外国語科目についての結果です。外国語科目は他の科目と比較して非常に特異的で

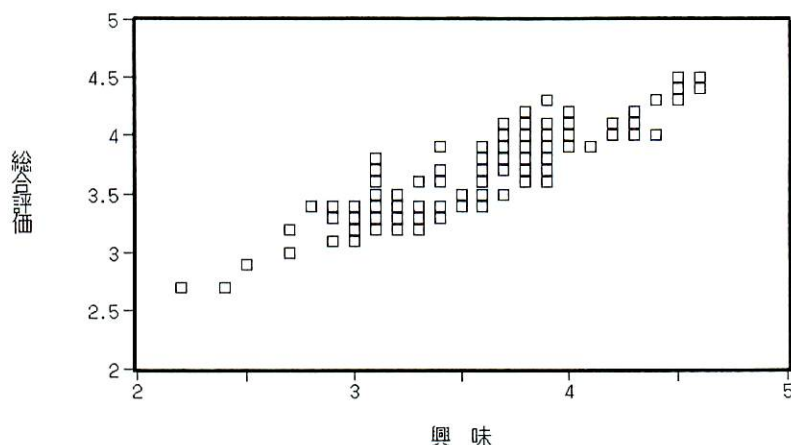


図 7 総合教育科目における総合評価と興味の関係

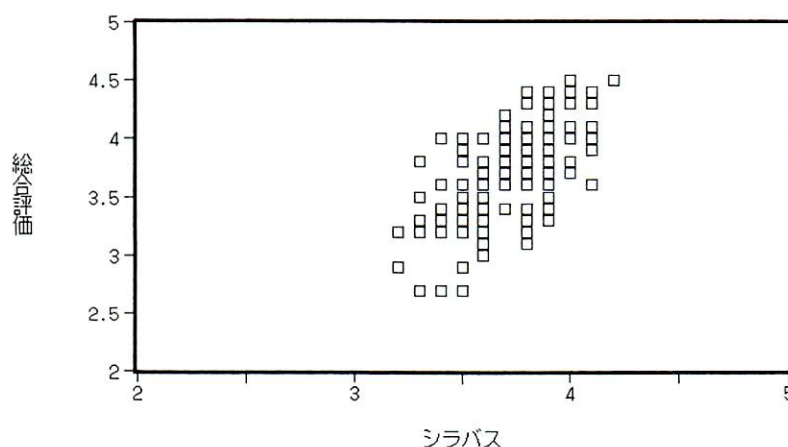


図 8 総合教育科目における総合評価と計画実施の関係

す。興味が持てましたかの項目の係数が0.327と大きく、その他に0.2代の係数が見られず、外国語は興味が持てたかが非常に支配的であることがわかります。したがって、少なくとも語学は興味を持たすような講義でなくてはならないということだろうと思います。図9は語学における興味と総合評価の関係で相当に直線性がよいことが見られます。表1の3段目は専門基礎科目の重回帰分析の結果で、少し傾向が違ってきます。総合教育科目も外国語科目もともに興味が一番ウエイトが大きかったわけですが、ここでは「教師は授業において重要なところを強調し、要約してくれましたか」が最もウエイトが大きくなっています。専門基礎科目とはどのような科目かと申しますと、工学部における数学、物理、化学などです。したがって、数学、物理、化学などで、学生が求めているのは、この授業の何が大切で、何を学ばよいかを明確に示すことです。

先生方は、学生にとって強調するということは試験に出るところを強調することであるとよく言われます。一概にそうではないと私は思っています。ただ、先生方の中には「重要なところを強調してくれましたか」に対して、「重要かどうかは学生によって違うわけだから、授業においてあることを強調すべきでない、教員の偏見を押しつけるべきではない」と言われる方もいます。しかし、少なくとも物理や数学や化学を学んでいる工学部の専門基礎の段階で、何が大切かを示す必要があ

ると思います。工学部、理学部に来ると4年間で覚えなくてはならない式が200程度あるそうですね。その内、基本の式は5つか6つだそうですが、これを示す程度のサービスは必ず必要であると思います。むしろ、私自身は教員が大切なところを強調することこそ、大学の授業だと思っています。相関関係は同様ですので省かせていただきます。

図10(次頁)は、身分別評価の平均値を示したものです。93年度の前期が実線で、専任では教授が一番低く、助教授が一番高くなっています。そして、非常勤の教員が更に高くなっていますから、大学は全部非常勤の教員で授業を行うべきだということになりかねません。しかし、図5に示したように、外国語科目の評価が非常に高く、1、2年の科目ですので、外国語科目の占める割合が非常に大きいことから、非常勤の先生として全部をまとめてしまうと、外国語の非常勤の先生に引きずられて評価が高くなっているわけです。実際には非常勤と専任を各総合教育、外国語、専門基礎、専門科目の中で比較をして平均をすると、ほとんど差はありません。

専任の教員を比較致しますと、教授が一番低くて、学生からあまり人気がないことは確かなようです。私が注目しているのは比較的若いと思われる専任講師の評価が回数を重ねる毎にだんだん上がっていることです。ここには93年度の前期、後期、94年度前期の3回のデータがありますが、私にはだんだん平均化されているように見えます。

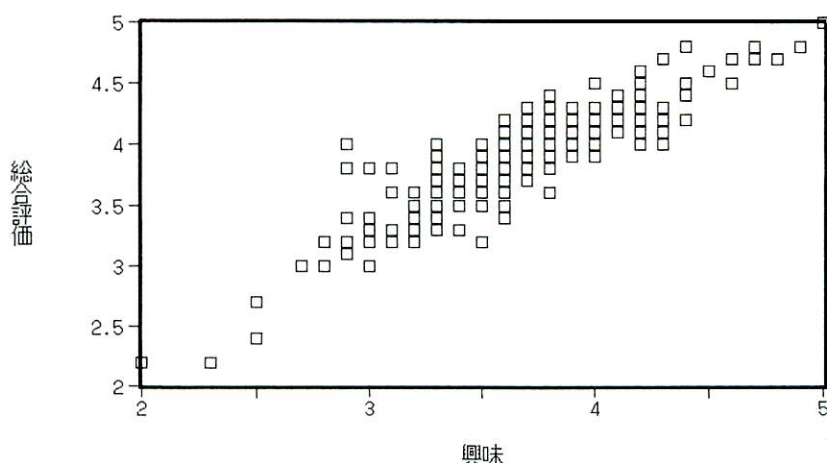


図9 外国語科目における総合評価と興味の関係

この評価の高かった助教授の先生方がどうしてももっともっと高くないかと申しますのは、言い過ぎかもしれませんが、この先生方がこの高い評価をとっても今のところだれも褒めてくれない。よくとりましたねとだれも言ってくれない。褒美もくれない。したがって、おれたちはこんなものだと安心して、怠けてしまいます。評価の低い先生方は、こんなに低いと、ちょっと格好悪いかなと思って、努力するのではないかと考えております。

図11は年齢別の評価の平均値を示したものです。20代というのは20歳から29歳までの平均をとっています。多少、学期によってばらついておりま

すが、少なくとも年齢とともに評価は低下する傾向にあります。これはどうしてかと申しますと、もちろん世代の差もあると思いますが、私の経験では、常に何か自己研鑽というか、自分で何か授業改善の努力を続けていないと、授業評価の結果は年々低下するような気がいたします。これにつきましては後ほど、紹介させていただきます。先ほど関東教育工学部長会でこのお話を発表させていただきましたことを紹介していただきましたが、この折、ある先生からのご質問で、「私が聞いておもしろかった先生はご年配の先生でしたが……」という話がありました。これは、全体の傾向のわけで、ある

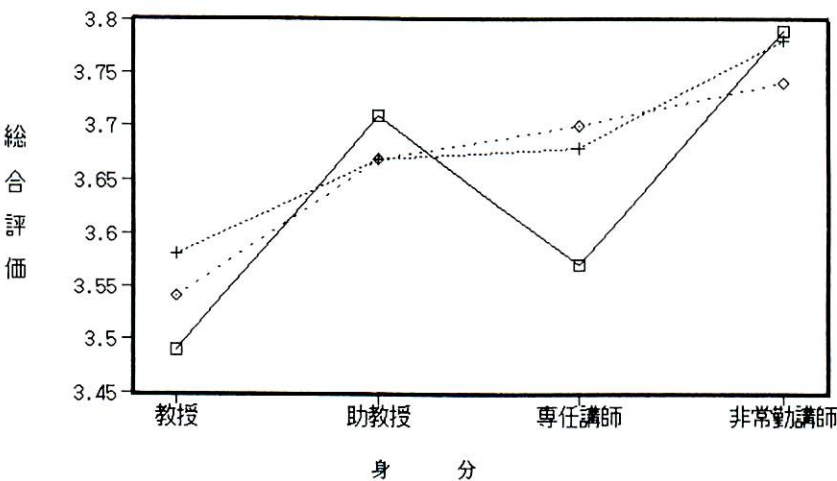


図 10 教員身分別評価

□ : 93年度前期 + : 93年度後期 ◇ : 94年度前期

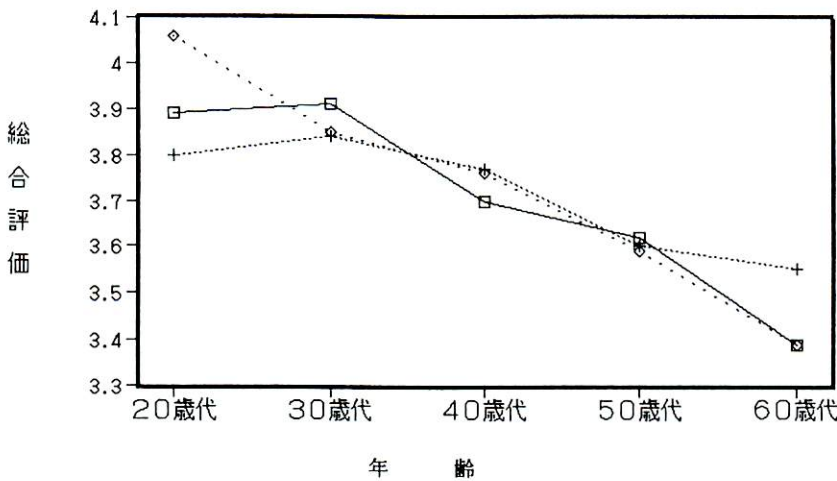


図 11 教員年齢別評価

□ : 93年度前期 + : 93年度後期 ◇ : 94年度前期
各点は20、30・・・歳代の教員の平均値である。

個人についてはこの傾向は全く当てはまらない場合があります。しかし、全体として3,000クラスの集計結果がこの傾向を示しているということです。そして、この結果は教授の評価が最も低い図9の結果と一致することから、教授になったからといってふんぞり返ってはいけな気がいたします。

図12は任用別評価の平均値を示したものです。図中の専任、非常勤はご理解頂けると思います。特任は東海大学独自の呼称かと思いますが特任第一種は65歳で一度退職されて、その後1年契約の先生方です。特任第三種は2年契約の外国人の先生方です。採用の一つの条件は第二外国語を教える修士課程を修了していることです。図から分かりますように外国人の先生方の評価が異常に高い値を示しております。私はこの理由は何かと思ひまして、早速外国人にアンケートをとってみました。表2（次頁）は教育研究所の発行しております『FDニュース』の一部です。この表から、「外国語を教えるためのコースや研修を受けたことがありますか」に対して、修士課程でそれを取ることが条件になっておりますので、外国人は100%受けております。そして、それが「有効であるか」に対して、1人を除く95%の外国人が非常に有効であると回答しています。それに対して日本人は70%受けおり、この内の79%の先生が有効であると回答しています。この70%の日本人教員が研

修を受けているという回答は私の予想をはるかに越えた値でしたので、日本英語学会の会長の小池先生に聞いてみましたところ、次のようなお答を頂きました。「日本英語学会は研修を行っているけれども、全体から言うとほんの数%の人が受けているのみである。東海大学は独自にネイティブの先生方を交えて研修を毎年行っているの、それを受けた人が多いのではないのでしょうか。」したがひまして、日本全体を平均すると、語学の先生方がこんなにたくさん研修を受けているということはないと思います。

次に、「授業改善のための情報はどのように入手しておりますか」に対して、特に違うところは何かと申しますと、日本人はほとんど書物から情報を得ています。これに対して外国人は学会の出席とか仲間たちのディスカッションは勿論ですが、自分の卒業した大学とのコンタクトによって情報を得ていることです。すなわち、大学に授業改善のシステム、方法が確立されているわけです。日本の大学にはこのようなシステムがなく、この点が大きな違いだろうと思います。

6番目の質問は「あなたの授業の評価結果が高い理由はどうしてだと思いますか」です。お手元の資料の最後に英語の文章が3枚ほどついていますので、後で読んでいただくと、外国人の先生方がどんなことに気を遣われているかが分かってい

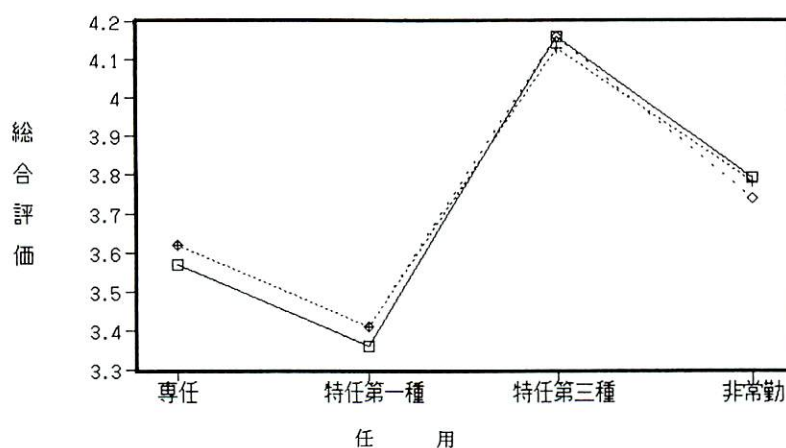


図12 教員任用別評価

□ : 93年度前期 + : 93年度後期 ◇ : 94年度前期
 特任第一種：主に定年退職した教員 特任第三種：主に外国人の教員

表2 外国人教員と日本人教員別「外国語教育に関するアンケート調査」

●94年11月調査。()内は日本人教員の結果。回答者数＝外国人教員(20)／日本人教員(27)。質問は一部抜粋・割愛してあります。

Q1：外国語を教えるためのコースや研修を受けた経験は？

経験がある	100%	(70%)	経験がない	0%	(30%)
-------	------	-------	-------	----	-------

Q2：そのコース・研修は語学を教えるために有効でしたか？

(問1で「ある」と回答した教員のみ)

有効である	95%	(79%)	有効でない	5%	(16%)
-------	-----	-------	-------	----	-------

Q3：授業改善のための情報の入手方法はなんですか？

学会への出席	75%	(41%)
--------	-----	-------

ディスカッション	75%	(56%)
----------	-----	-------

ホームユニバーシティ	50%	(0%)
------------	-----	------

書物	20%	(67%)
----	-----	-------

Q5：授業で何に重点をおいて教えていますか？

会話	55%	(37%)
----	-----	-------

文化	50%	(37%)
----	-----	-------

コミュニケーション	40%	(48%)
-----------	-----	-------

文法	0%	(41%)
----	----	-------

Q7：先生の授業を見せていただけますか？

はい	95%	(30%)	いいえ	5%	(70%)
----	-----	-------	-----	----	-------

ただけます。例えば、先生方が最も気をつけていらっしゃることは英語を間違っても、それを恐れないような雰囲気をつくること。個人的に学生に興味を持つこと。また、私は学生が好きだし、学生も私が好きだというようなことが書かれています。このような配慮は中学校や高校でやるべきことであると言ってしまうかもしれませんが、現実になんかそういうことが十分になされていないわけですので、大学で英語嫌いを無くすためにも考えなくてはならないと思います。

一方、学生は外国人の授業の何を評価しているか学生さんに尋ねてみたものが表3です。それも『FDニュース』の一部ですが、問1は授業内容について、問2は授業方法について、問3は外国人と日本人の違いについての質問であり、問4は問1～3においてどれが最も重要か聞いたものです。この結果、46%の学生が問3と回答しておりますので、問3の中で一番回答率の大きいユーモアが最も大切であることとなります。ユーモアがあればよい授業かということ、そうとも言いきれませんが、先ほどの重回帰分析の結果では、興味の

ある授業が語学では要求されていまして。この意味において、ユーモアは興味のある授業をつくるために非常に有効であるというふうに私は考えております。

そろそろ時間が少なくなってきましたけれども、図13(14頁)は受講者数と評価の関係です。これを見ていただくと、両者の間に関係があるともないとも言えます。東海大学の先生方への報告書に何故この図を示しているかと申しますと、これを見ると、自分の授業が全体の中でどの位置にあるということが分かるためです。ご自分の授業評価の結果が2.5であれば、どの辺かというのがわかるように意地悪く載せてあるわけです。低い評価の部分と比較致しますと次のようなことが分かります。図12は93年度後期の結果ですが、93年度の前期の結果も同様に先生方にお知らせしております。93年度の結果において、評価が2.5以下の数を数えますと24個ありました。ところが、図12の93年度の後期になりますと、2.5以下の評価が8個に減少いたしました。底辺を上げるという意味では授業評価が授業改善に役立つということが分

表3 学生に対する「外国語教育に関するアンケート調査」

●94年11月調査。回答数=546（文系6・理系7クラス）。回答は高く評価できる項目3点以内にマークする方式。数値は平均値、（ ）内は（文系・理系）。質問・回答は一部抜粋・割愛してあります。

Q1：外国人教員の授業内容を高く評価できることはなに？

- | | |
|----------------------------|-------------|
| ①ヒヤリングが訓練できる | 50% (49・50) |
| ②授業内容が面白い | 37% (40・34) |
| ③少ない言葉でもコミュニケーションできることを学べる | 37% (35・38) |
| ④使える英語が学べる | 26% (31・20) |
| ⑤言葉だけでなく、文化や考え方を学べる | 20% (21・19) |
| ⑥色々な表現方法（言い回し）を学べる | 17% (20・13) |

Q2：外国人教員の授業で次の授業方法について高く評価できるものは？

- | | |
|--------------------|-------------|
| ①ゲーム形式で会話を行う | 46% (48・44) |
| ②外国人の教員が授業への参加を促す | 42% (44・40) |
| ③ペアで会話をさせる | 35% (35・35) |
| ④教員よりも学生が中心である | 35% (37・32) |
| ⑤グループでディスカッションをさせる | 30% (29・30) |
| ⑥教え方が上手である | 19% (20・17) |

Q3：外国人と日本人の違いについて外国人を高く評価できる理由は？

- | | |
|-------------------|-------------|
| ①外国人教員はユーモアがある | 43% (49・37) |
| ②外国人の教員はフレンドリーである | 42% (46・37) |
| ③外国人の教員の発音はきれいである | 34% (37・31) |
| ④外国人の教員は愉快である | 30% (29・30) |
| ⑤外国人教員の授業は雰囲気が良い | 28% (30・26) |
| ⑥外国人は熱心である | 22% (21・23) |

Q4：Q1、Q2、Q3の中で外国人教員を最も高く評価できる理由はどれ？

- | | |
|----------------|-------------|
| Q1（授業内容） | 26% (28・24) |
| Q2（授業方法） | 20% (18・22) |
| Q3（外国人と日本人の違い） | 46% (47・45) |

Q8：外国語の授業で最も身につけたいことはなに？

- | | |
|-----------|-------------|
| ①実用会話 | 55% (56・54) |
| ②ヒヤリング・発音 | 18% (23・12) |

Q9：外国語の外国人教員に要求することは？

- | | |
|---------|------------|
| ①日本語の勉強 | 13% (9・17) |
| ②分かりやすく | 4% (4・4) |

Q10：外国語の日本人教員に要求することは？

- | | |
|----------------|------------|
| ①楽しく授業をしてほしい | 13% (17・9) |
| ②実用的な英語を教えてほしい | 8% (11・5) |

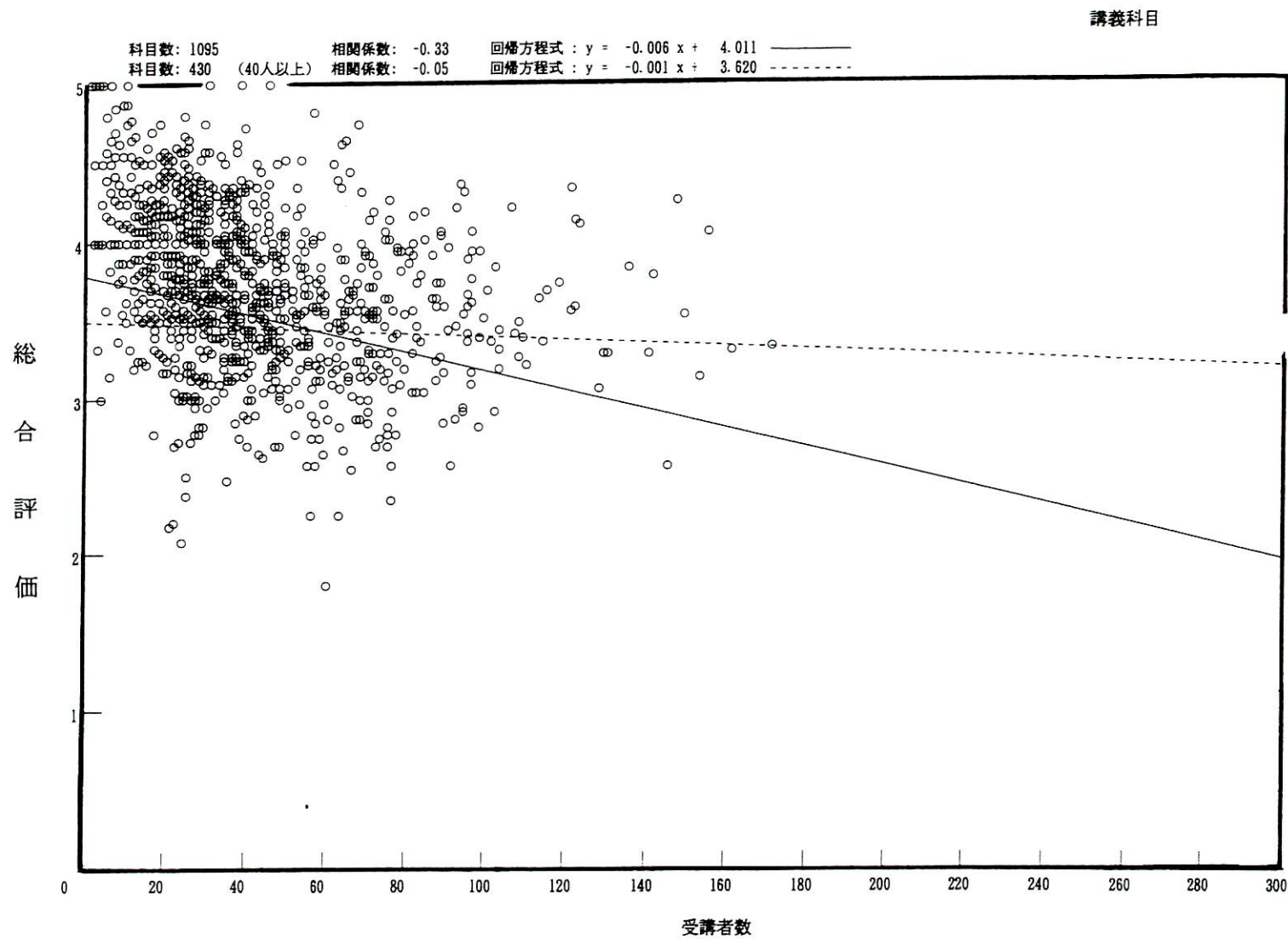


図 1 3 1993 年度後期講義科目全体における受講者数と総合評価の関係

かります。

残念ながら、このように評価の低い部分は上がりますが、全体といたしましてはあまり効果が見られません。先ほど申し上げましたが、低いところは上がるけれども高いところは上がらないのは評価システムが十分でないためであると、私は思っております。

私事をちょっと紹介させていただきます。これは先ほど紹介していただきました関東教育工学協会の部長会で発表する数日前だったと思いますけれども、私の部屋の卒業生が尋ねてきて、次のように呟きました。「私は今年で高校の教員を5年もやっているんですけども、だんだん学生が私の話を聞かなくなり、授業が上手に進められない。」そこで、どんな授業をやっているのか聞いてみましたところ、「いつものように10分か20分、授業の前に準備をして、普通に授業を行っている」ということでした。その折り、私の経験を説明するために用いたものが図14です。こんなにきれいに書いたわけではなく、手書きで示しましたがそれをきれいに書き直したものです。私十年余前に授業評価を始めました。最初は10点法でしたので、これを5点法に直しますと3.9でした。これは結構よい点である、来年は4を超える。すなわち、そのときは10点法ですから、8点を超えると思いま

した。ところが次の年には図のように評価が下がりました。おかしい!!。来年こそと思っても結果はまた下がりました。そして、またまたさがりました。どこまで下がるかととても不安になっていました。この私の経験では、卒業生と同じく10分か15分、授業の前に準備して授業を行ってれば、大体こんな速度で毎年下がるということです。

学科で一般化学の教科書をつくることになりまして、編集委員長を引き受けました。したがって一般化学の教科書の原稿を少なくとも3回以上、学生の立場で読みますと、授業評価が上がりました。基礎的な勉強、あるいは何かの充填を何年かに一度する必要があると思います。その後、ミニツツペーパーと称します1分間で授業を評価する方法を導入いたしまして、その後、大体4点代を保っております。ミニツツペーパーは授業の評価をしていただくと同時に、きょうの授業のポイントと質問コーナーが設けられています。この質問コーナーに答えることで、私は学生さんが授業で疑問を持つということを奨励しております。図15(次頁)がミニツツペーパーの解析の結果です。きょうの授業はどうであったかということが分かります。話し方や情熱はよかったということがわかりますが、黒板とOHPの使い方が悪いことも分かります。

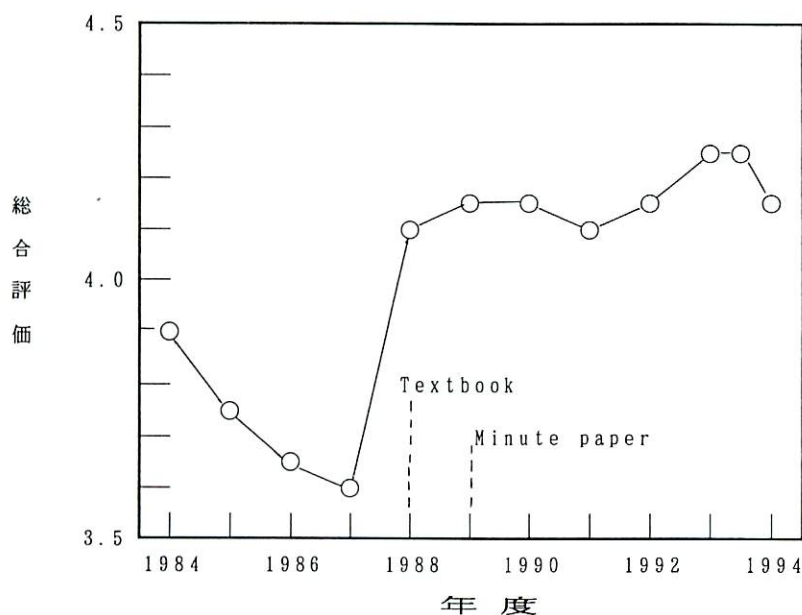
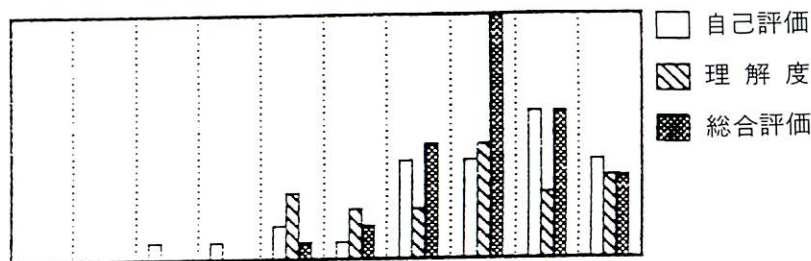
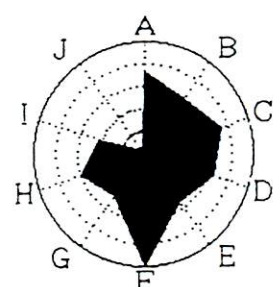


図14 私の授業評価の年変化

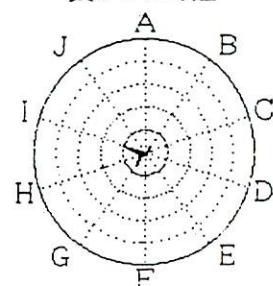
評価の分布 【科目番号 48194 調査日 06/15 調査人数 43】



評価		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
自己評価	人数	0	0	1	1	2	1	6	6	9	6	平均	7.9
	比率	0.0	0.0	2.3	2.3	4.7	2.3	14.0	14.0	20.9	14.0	標準偏差	1.8
理解度	人数	0	0	0	0	4	3	3	7	4	5	平均	7.7
	比率	0.0	0.0	0.0	0.0	9.3	7.0	7.0	16.3	9.3	11.6	標準偏差	1.7
総合評価	人数	0	0	0	0	1	2	7	15	9	5	平均	8.1
	比率	0.0	0.0	0.0	0.0	2.3	4.7	16.3	34.9	20.9	11.6	標準偏差	1.2



良かった項目



良くなかった項目

項目の分布 【科目番号 48194】

調査日 06/15 調査人数 43

項目名	良かった		良くなかった	
	人数	比率	人数	比率
A: 話し方	22	51.2	0	0.0
B: 情熱	18	41.9	2	4.7
C: 学生との関係	22	51.2	1	2.3
D: 講義の質	20	46.5	0	0.0
E: 講義の量	16	37.2	1	2.3
F: 講義の分かり易さ	30	69.8	0	0.0
G: 将来役立つ講義	14	32.6	4	9.3
H: 刺激・興味	18	41.9	2	4.7
I: 黒板OHPの使い方	13	30.2	6	14.0
J:	1	2.3	0	0.0

出欠調査表 【科目番号 : 48186 調査回数 : 7】

原簿データ 氏名(カナ)	学 番	月 日	04 27	05 11	05 18	05 25	06 01	06 08	06 15	出 席	欠 席
20EP3219			○	/	/	○	○	○	/	4	3
21AP1154			/	/	/	○	○	○	/	3	4
22AP1153			○	○	/	○	○	○	/	6	1
30AP1134			○	○	○	○	○	○	/	5	2
40AP1101			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1102			○	○	○	○	○	○	/	6	1
40AP1103			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1104			○	/	○	○	○	○	/	5	2
40AP1105			○	/	○	○	○	○	/	5	2
40AP1106			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1107			○	○	○	○	○	○	/	6	1
40AP1108			/	○	○	○	○	○	/	5	2
40AP1109			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1110			○	○	/	○	○	○	/	5	2
40AP1111			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1112			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1113			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1114			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1115			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1116			○	/	○	○	○	○	/	6	1
40AP1117			○	/	○	○	○	○	/	6	1
40AP1118			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1119			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1120			○	○	○	○	○	○	/	6	1
40AP1121			○	○	○	○	○	○	/	6	1
40AP1122			/	/	○	○	○	○	/	5	2
40AP1123			/	○	○	/	○	○	/	4	3
40AP1124			/	○	○	○	○	○	/	6	1
40AP1125			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1126			/	○	○	○	/	○	/	4	3
40AP1127			○	○	○	/	○	○	/	6	1
40AP1128			○	○	○	/	○	○	/	5	2
40AP1129			○	○	○	/	○	○	/	6	1
40AP1130			○	/	○	/	○	○	/	4	3
40AP1131			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1132			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1133			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1134			○	/	○	○	○	/	/	5	2
40AP1135			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1136			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1137			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1138			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1139			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1140			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1141			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1142			○	○	○	○	○	/	/	6	1
40AP1143			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1144			○	○	○	○	○	○	/	7	0
40AP1145			○	○	○	○	○	/	/	6	1
40AP1147			○	/	○	○	/	/	/	4	3

実際に大学として先生方に返しております授業評価の結果は、数値の集計と全体の分布ですが、教育研究所はこのような個人票をつくりまして返却しております。図16(次頁)は私が今までに取ったうちで一番よかったので、4.4でした。これは位置づけとして偏差値が示されており、全体では63となっています。専門基礎の中では69になっています。偏差値69は上位3%、63は上位10%に相当いたします。このように担当授業の位置が明確に分かるようになっております。

私が学生の評価を信用している一つは、私は非常に板書が下手です。したがって評価が変わっても、私の板書が悪いほうに出ている限り、私は学生の評価は信用してよいと思っております。学生はシビアに評価しているということです。私の一つの例をお示しいたしましたが、同じ授業を続けていると評価はだんだん下がります。最近あまり充填しておりませんので、だんだん下降気味です。このようなことに気がつかないで授業を行っておりますと、評価は下がりっぱなしではないでしょうか。授業評価を実施しなければ、このようなことがわかりませんので、少なくとも授業が学生に理解されているか、学生が授業をどのように受けとめているか知るために、最低限度の義務として授業評価を行う必要があると思います。以上です。

司 会 どうもありがとうございました。とりあえず、ご講話に対して感謝の意を込めて拍手を贈らせていただきたいと思います。(拍手)

(休憩)

司 会 時間が5分ほど早うございますけれども、これから質疑・応答に入らせていただきたいと思います。

安岡先生には教育評価というようなことでお話をちょうだいいたしました。ご自身の評価までお示しいただきまして、非常に具体的な迫力のあるお話を伺えたのではないかと思います。真壁先生には21世紀を担う学生をどう育てるかということ、非常に意欲的に大胆な改革に取り組んでおられます具体的な内容をご例示いただきました。

私、実は産業界におりますので、こういう教育

の具体的な内容についてはほとんど両先生のお話、ぴんとこないところもあったんでございますけれども、真壁先生は、今までとは異なる産学連携、特にリサーチ・アシスタントというご提案がございまして、私も産業界に身を置く者としては具体的な例示として大変参考になったような気がいたします。

それで、最初にまず安岡先生に対するご質問をお受けいたしたいと思います。何とぞご活発なご討議をお願い申し上げたいと思います。それでは、安岡先生、ひとつよろしく願いいたします。どなたからでもどうぞ。

今 井 口火を切る意味でやらさせていただきます。魅力ある授業ということをおられるわけで、今のお話の中では、つまり、学生から見て魅力があるという点はいろいろ評価しておられるのはよく分かりますけれども、先生からごらんになって、これはなるほど魅力ある授業だ、つまり、同業者という言葉は悪いかもしれませんが、こういう立場で授業を評価して見ておられるということがございますでしょうか。

安 岡 学生の評価が信頼できないという先生方が沢山おられますので、他の評価はどうかということで同僚による評価を含めて評価方法についてアンケートをとったことがあります。その結果、同僚による評価を指示した先生方が最も少なかったことから、残念ながら同僚による評価、同僚からみた魅力については、今のところ検討しておりません。

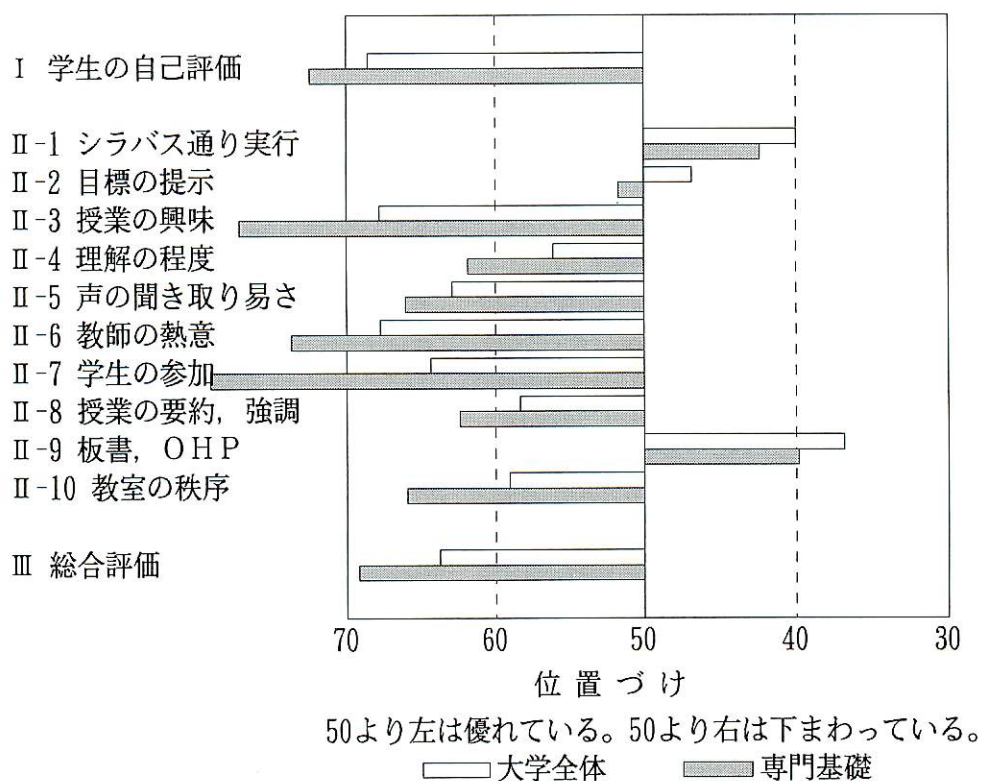
今 井 ちょっと言葉が足りなかったんですけれども、学生による評価が信頼できないという意味じゃありませんで、教える側の立場と教わる側の立場では観点が違うんじゃないかと思うんです。今、教わる側の立場を非常に尊重するようになってきたわけですが、その意味でございまして、学生の評価が信頼できないという意味ではございませんので、よろしくどうぞ。

安 岡 分かりました。残念ながら、今、申し上げましたように、教員側からみた魅力については検討しておりません。私は理学部に所属しており、先ほど最初にお示しました自己評価のマップの中に、学部には学部評価委員会があります。その

図 1 6 授 業 報 告 書

科目番号 48194 科目名 化学＝

項目	評価の分布					平均値	標準偏差	修正平均
	5	4	3	2	1			
I 学生の自己評価	20	21	5	0	0	4.33	0.66	4.39
II-1 シラバス通り実行	4	15	21	6	1	3.32	0.88	3.31
II-2 目標の提示	6	17	21	3	0	3.55	0.79	3.54
II-3 授業の興味	29	14	3	1	0	4.51	0.71	4.64
II-4 理解の程度	4	25	14	4	0	3.62	0.76	3.64
II-5 声の聞き取り易さ	32	10	5	0	0	4.57	0.68	4.69
II-6 教師の熱意	38	8	1	0	0	4.79	0.46	4.87
II-7 学生の参加	38	8	1	0	0	4.79	0.46	4.87
II-8 授業の要約, 強調	19	15	11	2	0	4.09	0.90	4.15
II-9 板書, OHP	3	6	19	10	9	2.66	1.12	2.62
II-10 教室の秩序	19	17	10	1	0	4.15	0.82	4.21
II-11	0	0	0	0	0	0.00	0.00	0.00
II-12	0	0	0	0	0	0.00	0.00	0.00
III 総合評価	22	22	3	0	0	4.40	0.61	4.46



曜日時間 水曜日3時限 担当教員 理学部化学科 安岡 志

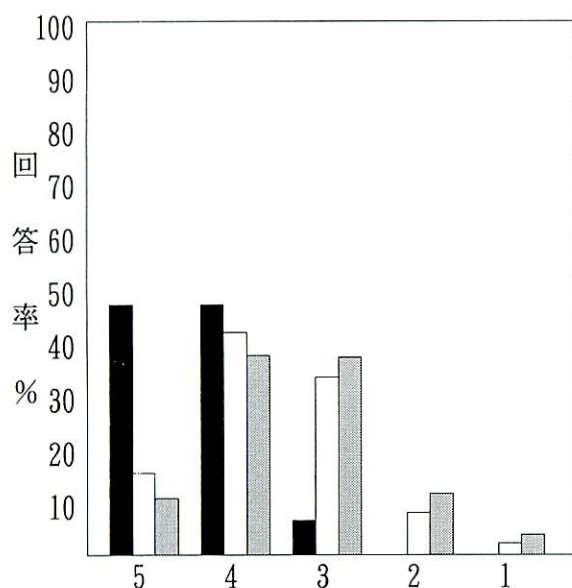
大学 修正平均	大学 標準偏差	位置づけ	専門基礎 修正平均	専門基礎 標準偏差	専門基礎 位置づけ
3.81	0.31	68.55	3.80	0.26	72.41
3.75	0.45	40.02	3.60	0.38	42.40
3.68	0.45	46.85	3.47	0.40	51.68
3.59	0.59	67.81	3.19	0.54	77.04
3.28	0.60	56.09	2.94	0.59	61.87
3.84	0.66	62.90	3.47	0.76	66.04
3.90	0.55	67.75	3.60	0.54	73.66
3.71	0.81	64.33	3.11	0.61	78.97
3.70	0.54	58.37	3.49	0.54	62.40
3.41	0.60	36.83	3.26	0.64	39.83
3.66	0.60	59.04	3.33	0.55	65.93
2.47	1.72	35.62	2.52	1.64	34.59
2.28	1.75	37.01	2.46	1.67	35.32
3.73	0.53	63.75	3.44	0.53	69.18

修正平均：不適切な学生の評価を除くために上位・下位10%を切り捨てた平均値

大学修正平均：修正平均を用いた大学の全体の平均値

専門基礎修正平均：修正平均を用いた専門基礎科目の平均値

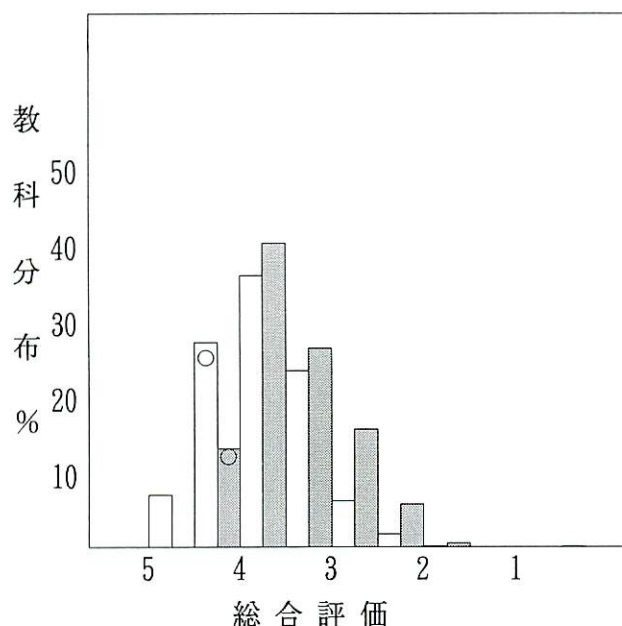
位置づけ：先生方の修正平均の分布を標準化し、おおよその位置が分かるようにしたものです。65以上は実施科目全体（例えば：1000）の上位約7%、55は上位約30%、45は上位約70%、35は上位約93%を表します。これらの数値を目安に先生方の位置を知って頂けるようにしたものです。



総合評価の分布

■:担当教科 □:大学全体 ▨:専門基礎

回答者数:担当教科; 47
大学全体;65581
専門基礎;10750



大学全体の修正総合評価の度数分布
および専門基礎科目の修正総合評価の度数分布
および担当教科の修正総合評価の位置

○:担当教科の位置

□教科総数:1480

▨専門基礎:196

理学部の評価委員会では、学生の授業評価というのは一体何かというと、ある意味での学生の満足度だと解釈しております。それでは、満足したからよいかと申しますと、当然、教える側としては、どれだけ学力がついたかということをはからなくてはいけないということが議論になりました。1年生と4年生のとき、すなわち入口と出口で同じ試験をして、どれだけ学力がついたか測定をすべきかどうかについて検討いたしました。その折の議論では、本来そういうことをすべきだが、導入はなかなか難しいということで、二つある授業評価の自由設定項目の一つに、あなたはこの授業でどの程度学力がついたと思いますかという項目を理学部としては自主的に入れてはどうだろうということになりました。直接的な回答でなくて申しわけございません。

今 井 ありがとうございます。

司 会 どうぞ。

高 橋 東京工科大学の高橋でございます。私ももそろそろ学生による授業の評価をやりたいと思っておりまして、大変参考になるわけですが、93年度からほぼ全面実施と、90何%とおっしゃいましたが、それは1年次の科目についてであられますか。

安 岡 はい、93年度のカリキュラムからですので、93年度の入学生からということです。したがって、93年度は1年生だけ、92年度は1、2年生。今年は1、2、3年生が対象ということになります。

高 橋 それから、このミニッツペーパー、これは先生ご自身の評価、科目の評価に使っていますか、あるいは、これが正式の評価の……。

安 岡 湘南校舎には三つ教務課分室があり、その分室に教員が自主的に各自、自由に持っていけるようにミニッツペーパーの用紙を教育研究所が備えてあります。そこに読み取り機とコンピュータが同時に備えてありますので、先生方は授業に行く前にカードを自分で持って行き、授業で使われ、返ってきて、読み取り機にかけます。すべての処理が大体5分程度で終わるような感じです。

高 橋 そうすると、全学的な評価に使われるこういう紙とはまた別の紙ですか。

安 岡 はい、別の紙です。評価項目は先ほどのお手元の資料の重回帰分析の下にある項目が評価用紙に印刷してあります。95年度の今年から多少表現が変わっております。それから、一つだけ変わったところは先生方の意見を取り入れました。先生方の要望は学生がどれだけ予習してきたか、宿題をしたか、などを聞けということでした。私としてはあくまでも授業評価ですのでそういうことは入れる必要はないと思っております。これらの意見は、どちらかと言うと先生方のしっぺ返し of 気持ちだろうと思いますが、あまりそう言ってしまうと先生方の協力が得られないわけですので、我々の意見も酌んでもらったということが分かるように項目検討委員会で決定いたしました。一番上にあります学生の自己評価の最初の項目は、出席その他を考慮して、あなたの自己評価を示してくださいというものですが、先生方の要望を入れて、先生方が自由に入れる項目を2項目追加したような形になっています。

高 橋 正式のアンケート用紙の配付の回収の方法、その辺はどういうふうに。

安 岡 今までは実施率を上げることを第一目的といたしておりましたので、全教員のところに必要な枚数を詰めて担当教員まで届ける。そして、教員が実施いたしまして、封をしまして、教務課経由で教育研究所に届けます。

高 橋 教員が封を。

安 岡 教員が封をします。

高 橋 そうすると、教員がちょっと、学生の名前は書いてあるんですか。

安 岡 名前は書いておりません。

高 橋 書いてないんですか。

安 岡 はい。先生方の意見では、まじめにやるという意味で記名にしろという意見もありますけれども、我々の研究結果では、記名にしても無記名にしても評価はほとんど変わらないことが分かっています。

司 会 よろしゅうございますか。次の先生、どうぞ。

太 田 ポリテクニクの太田と申します。私も前に関東工学教育協会の監督、会長をやらせていただいております、大変興味深く伺いたいし

ました。私の質問は、先ほどの今井先生のお話とちょっと重複いたしますが、学生の満足度の評価ということは、やはりミクロレベルの評価だと思うんです。もう一段上のメゾレベルと申しますか、先生からのということもありますけれども、最終的には教育効果を問題にするわけですから、カリキュラムとのかかわりみたいなものもあると思うんです。そうすると、学生のほうから言えば、個々の授業に対する満足度というのはあると思いますけれども、学科全体に対する満足度みたいなものとか、教育効果というものをどういうふうにとらえられようとしているのかというようなことをちょっとお聞きしたいと思います。

安 岡 学科の満足度ということでございますけれども、我々のところでは、先ほどちょっと申し上げましたけれども、一応、個々の授業の授業評価ということで、学生からの授業評価について、自分はこれでよいかどうかということを診断いたします。もちろん評価が高ければいいというわけではありません。例えば、自分は評価は低いけれども、こういう理由で自分がこういう授業を行って、こういう結果であるから、自分はそれで満足をしているというふうに診断書を書くことができます。それを各学科が全部集めまして、今度は、学科でそれでよいのかどうかを検討することになります。その学科が検討した結果を、また学部にかけてゆき、学部評価委員会が検討します。カリキュラム上の位置はどうか、教育効果がこれでよいかなどは、各教員の自己診断書のついた授業評価の結果をもとに、学科単位で検討するということになると思います。

原 田 熊本工業大学の原田でございます。4月に就きまして、まだ日が浅いんでございますけれども、大変おもしろいお話でありがとうございます。

ちょっと一つお伺いしたいことがございますけれども、専門基礎に対する評価がかなり低いということなんですけれども、これは、講義が終わってその直後にアンケートする場合と、例えば、1年生であった講義を卒業してとる場合とでは、かなり違うんじゃないかと思います。むしろ2、3年たってから、ほんとうに役に立ったかどうかと

いう評価が大事ではないかという気がしますけれども、そういうのはお調べになったかどうか、聞きたいんですが。

安 岡 分かります。授業評価が信頼できないという理由の一つには、そういうことを言われる先生が非常に多いです。講義というものは、その場で分かるものではなしに、数年たって分かるということもあり、おっしゃるとおりかもしれません。しかし、我々は、現時点での学生の意見を聞いていけないという理由ではないと思っております。我々は、それについては検討しておりませんが、具体例で申し上げますと、先週の土曜日、一般教育学会があり、桜美林短期大学が卒業生にアンケートをとったデータがありました。これは当然、必要なことだろうと思います。

司 会 原田先生、よろしゅうございましょうか。大橋先生、どうぞ。

大 橋 工学院大学の大橋でございます。ちょっとお伺いしたいのは、学生の側の満足度をはかる意味での授業評価が一つの面であるとする、我々、教員の昇進をはかるときに、教員の評価として教育の貢献度を入れる、加味すべきだという議論が昔からあるんですけども、研究貢献度に比べて教育の貢献度ははかりにくくて、なかなか実施をされないわけです。それで、これだけ進んだことをやっておられる東海大学は、教員の教育効果に対してどのくらいにお考えになり、なおかつ教育するところの学生の評価をそれに絡めておられるかどうか、その辺のことについてお伺いしたいと思います。

安 岡 現時点では東海大学でも昇進の基準は論文の数だけです。しかしながら、93年度の3月に出了た東海大学の自己評価に関する答申では、教育業績も何らかの方法で評価すべきであるということがうたわれております。94年度3月に出了た第二次答申では、教育評価を教員の利益材料として用いるべきであると書かれております。利益材料として用いるということは、教育方法が悪ければ、減点するのではなしに、よい方だけを評価しようというわけです。それでは、即、授業評価の結果が教育評価かということ、これはそうではないということが全学の合意になっております。

例えば、授業評価であっても、週に7こまも8こまも持っている人と1こまだけ持っている人、そんな極端な例はあまりないかもしれませんが、このような条件で単に評価が高いと言ってよいかどうかというようなことも当然あります。したがって、いまして教育評価を評価する学内のシステムが確立した後に、教育評価を教員評価の中に組み入れようというわけです。

一方、研究業績はどうかと申しますと、今まででも研究業績は評価されていることはされていますが、あまりシステムチックに行われているわけではありません。ある学科とある学科では随分感じが違うということもありますので、そのあたりも十分に組織としての検討をしてから、ゆくゆくは教員評価を実施することになるのではないかと考えております。私の個人的な希望と見解では、教員評価を絶対に給料にまでフィードバックする必要があり、これを行わなければ自己評価や自己点検を行ってもたいした効果はないと思っております。

司 会 ありがとうございます。

ほかに。先生、どうぞ。

森 三菱電機の森と申します。私、全然教育をやったことがないんですが、今のお話で、評価するのは評価した結果が何にフィードバックされるかということが非常に重要なんですけども、もともと大学の評価もずっと昔からあったわけですね。結局、日本の社会システムにマッチしないからできないわけです。会社の中でもそうだと思いますし、国立大学なんていうのも、ずっと60迄いくといったら、評価されても別に関係ないというような話になっちゃうわけですね。ですから、非常にドラスティックに言えば、やっぱり評価が昇進とかそういうものに関係してこないとだめだ。ただし、日本ではなかなか難しい。結局、そこに日本的なシステムか何かあるかということが、評価の今の最大の問題になっていると思いますけれども、その辺、ついでに申し上げると、研究と教育のウェートが、今までですと研究にウェートを置き過ぎていたわけですね。論文の数というのも、私、それだけでは非常におかしいと思うんですけども、むしろ教育のほうが主で研究は従である

というような考え方はとれないですか。

安 岡 学生から給料をもらっておるわけですから、教員が負っている義務は100%授業だと私は思っております。したがって、研究は趣味だと思っておりますが、このように申し上げますと意外と反発を示される先生方が多くおられます。そんなに割り切る必要もないかと思いますが、少なくとも私立大学は直接給料をもらっているのは学生さんからもらっているというふうに、私個人は思っております。少なくとも教育評価にこれからは相当重きを置く必要があると私自身は考えております。

司 会 先生、何か。

廣 松（政策専門委員） 東京大学の廣松と申します。私も教養学部におりまして、かつての一般教育に携わっておりますが、今、我々の間でもそういう評価に関していろいろ議論しております。ただ、外部評価に関しては煮詰まりつつあるんですが、残念ながら学生による評価というのはまだ日程にも上っておりませんで、安岡先生のお話、大変意欲的な試みとして拝聴させていただいた次第です。

私の聞き逃しであるかも知れませんが、この結果に関して、教師のほうに対してはこの教育研究センターを中心にいろいろフィードバックなさっていらっしゃるようですが、学生に対してどこまで情報を公開なさっているのでしょうか。例えば、安岡先生の講義のあれはお示しいただいて何点だったというようなことは、学生にはわかる仕組みになっているのでしょうか。

安 岡 現在のところはなっておりません。大学としましては、試行期間の93年、94年は個人にデータを返却する以外は全くほかに使わないということで出発いたしました。だから、94年までのデータは学校としては公開することはできないそうです。しかし、教育研究所は大学とは違いますので、先生方で公開してもよいという先生方がいらっしゃいましたら申し出て下さいというアンケートを取りました。94年度の後期、私のデータはすべて公開してよい、あるいは一部公開してよいという先生方が138名いらっしゃいましたので、現在それを、私が先ほど示しましたような個人データを冊

子にして発行する作業を行っております。我々が公開すべきだと考えている理由は次の通りです。学生にフィードバックをして学生の協力を得ることと、個人の先生が特定できないと、単に平均値が分かったり、傾向が分かっても、授業改善に結びつけることができにくい、個々の先生の励みになるなどです。できれば9月ごろにそれを出したいと思って準備をしております。

高 橋 138名というのは全体の何%ぐらいですか。

安 岡 大体1,000名おりますので。ちょっと分かりませんね、専任教員が1,000名です。それに非常勤が相当いると思いますので。

高 橋 30%……。

安 岡 ということかもしれませんね。(専任761名、非常勤441名の1,202名中147名、12.2%、1995.7.7現在)

司 会 はなはだ伺いにくいことを申し上げるようでございますが、御学は理事長先生が大変ご熱

心にお進めになられる、やはり理事長先生の非常に強力なリーダーシップのもとに、こういうやり方というのは進展してまいったんでございましょうか。

安 岡 実際には理事長でしょうけれども、我々が直接接するのは学長のわけです。すなわち、学長を中心とする執行部のリーダーシップがあったということです。もう一つの理由は、初代総長が非常に大きなリーダーシップを示しましたので、我々にトップの言うことを聞く習慣があるということだろうと思います。

司 会 ありがとうございます。何か他にもあるかも知れませんが、それでは、安岡先生への質問はこれで打ち切らせていただきます。

大変ご活発なご討議をいただきまして、有意義な時間を過ごすことができたことを大変感謝を申し上げます。きょうはどうもありがとうございました。(拍手)

1995年 9 月 8 日

編集
発行 日本工学アカデミー

〒100 東京都千代田区丸の内 1-5-1
新丸ビル 4-007

TEL : (03) 3211-2441 ~ 2

FAX : (03) 3211-2443